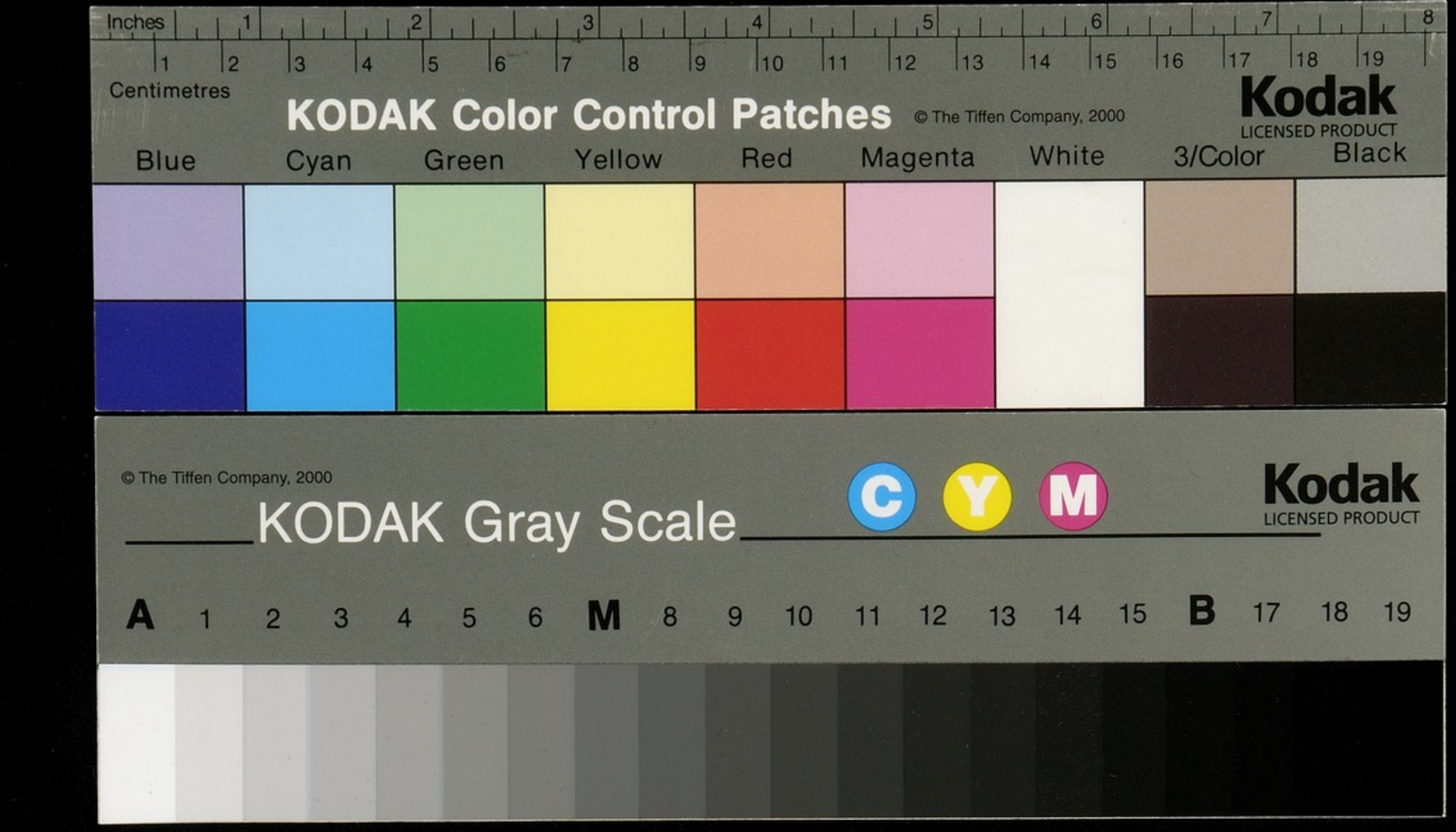

Inches
Centimetres
KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
© The Tiffen Company, 2000
KODAK Gray Scale
C
Y
M
Kodak
LICENSED PRODUCT
A
M
B


0
50
100
150
200


椿說弓張月 殘編 三

『椿說弓張月』殘編三

東都 曲亭主人編次

第六十一回

壁を穿て三兄源拔司と刺人とを
々涙汰て為朝窄都婆と痙む

疑心坐ふ暗鬼を生ぜ。物うろ
こゝありされバ松壽ハ必ずとも為朝親子ふ疑れ。久と言語もなき妻
ふ似うる千歳ふ伴ふて只假初ふ締びられえとしも仇よりけり。
さつろ頻ふ焦燥く。婦が心ふ一刀ふ砍も殺して君が為。おのが自
の為ふとて後の患を除んとて。門扉を些ー引あけて彼鶏丸の
宝劔の琲放べて身を潜ましまきり。小夜深ゆけバいとゞしく。軒端ふ来鳴く梟の声ハ高く深山

べ邊そ寞として物もみし浩処ゑ外面ょ滅裏くこと物の音して門の樹色推破りそるさへ潜り入るりのあり松壽ハ遥ょ透ー視くさハ癖者よとひとり点ひるゑ息もせて窺ひをり。こハちふびて癖者ハ母をふ潜り入りて頭を鶴草をゑ生る蛇のごく水ゑ離るく亀のごく。左まをえをり右まゑえをり赤低く臥ー高く這ひまり竹縁ゑまをけて只彼春の筍の生る如身を伸ー内ゑ入ふんとそるところを。松壽ハ閃りと走り出てふり揚る刃の光りと共ゑ首をうち落頭髻を絅さ入る。月影ゑはふくこれハ是則別人るふびさの山乃麓る猶夫辰平といふりのあり。さてハ千歳ゑかふられて大里按司を害せんため密母ゑ来つるともおぼし這奴憎むべーと罵りて蹴かへを死骸の懐より。滾くと轅び生をを何るふんとそまふとれバ人を呼子の笛りさればこそ支堂あれ鬱ょ王女が紀平治をおてこの処へ来まふ折山蔭なる樹下ゑ野臥ホが團坐ーて為朝を撃捕んと。高誄志つる氏竊聞せーと。宮ハせーふこのりのなるど。かくれバ千歳が野心あること。いよく推も量らる。と肚裏ゑて翠思ーつ引提しとも歩こよりて。やよ為朝ハ何処ゑ臥る容子ハいふゑ。とさし覗く。頓宗が細項を腸うけて一撃ゑ。むくと起るを背後ゑかくして。件の笛を吹くほどに暗号と猜るといふ声の。外面より洩れ笑えて。鞍計の悪根玖馬頓宗ホ彼色の透より。りうとも ゑ潜り入り。縁頬ゑ立ーりけるく松寿を辰平をやえぶんそるく。と

剿くしつ。そを毎〳〵千歳が誘りも来よ。りこの賊婦を撃漏さば。まこゝろ赤心を彼君ゐ。ためにしなるおゐほ足ぶ。とそくばく公ゐそこゝろ〳〵嘗久〳〵く押拭ふ刃を鞘よ納る折〳〵ふ。外面よ足音して戸を推開たるゝ丈夫ゆりまひ。うといひつ入る。千歳るゐ。とこゝろしが走ふしてういひがひ。しくまえちく〳〵はして。そひえしてせ退た。物の蔭へと身を潜ましてこゝろの寐刃あらせ砥よかゝる恨のありとふいまくふね。千歳ハ名のこ今霄今。細き孤燈の光よりも。先へそ滅る露の身に。何ゐひもく〳〵翌のうゐ。藁の帯して引提られ。こ升入の大甕。旅客をさ入宿せ〳〵ふ。夫婦が外まよりほ草。かき集てもまご足〳〵ね。旦開の炊の粟を買こて。そろべも夜を徐ーこう。みるそや睡りのひろめ。とひとりごちつ〳〵投る。板戸を走る刃の電ゐるや。と叫びて飛退けば。

疊うけて打太刀の下を潜りて受とる。甕の中の精粟身よ降かゝる邪慳の刃ハ。物ゐや狂ひまゐうん。悞あゝふが勸解もせそ假初ゐぐら小少年。夫婦迭ふりのあふがうて。顔赧せしみなれゐ何を恨こそかくまでゐ強顔人となりのふ。といふせもものへそ眼を瞪ぐし刃の邪そこゝろふ問へ甲夜よ汝がうくひ哉。とせ辰平玖馬頓宗う首そ既ゐ軀をそ斫れて。彼処ゐ外せるとゐほこんぞや。といれまき高く罵りて。亦猶ほうくまれを受ゐごを。甑も遂ふ砂裂れ。御禦ゐ難つ逃まどふ嘗嚇れて轉轢弗とより離ゐ髪結ふ黒髪。忽地乱を。焼白刃の下。狐彼此と臥ゐ避て起あゐる。右ゐの肩より乳の下ゐけて砂れて撞と仆れけり。事のやうを窺窺これ。為朝ハ紀平治よ延屏風をひくかゝく。王女舜天丸りうともに端近う出そ松壽ゐ對ひ。言と行とにゐたがゐね。

東風平按司の誠忠い賞そべくも疑ふべうもあらぬ。既ゐ間諜の癖者を悉く砍て六段とせし。恩愛を棄凝情ゐ断まじ。又この千歳を撃ちあるそれ。手練の太刀をもち勇あり。より窺ふるゐ燈火の光ゐ明それと千歳が姿を障子へうつりこれを推量ゐたがふとおぼく。亦曚雲が幻術ゐて。この婦を假り生ー足下の乞を蕩ーそ為朝を撃ませんと。ぬるくゐも謀るりのとおぼし死骸を展検ゐ人と宮ふにこころを初て松壽ゐ描の指燭ーつ。るりこともに足をこれゐ。これ跡ゐ印れー跡ゐるれ厳ゐ只一本の窄都婆となりて。中よりも切口の太刀跟えゐる羅漢救。こゝくいうゐ。とさーまりて主従ぬるくも怪こころり松壽ゐ窄都婆をうちかへしうちえーえて眉を顰め。これ是しいねる比。生活が菩提の為。某窩ゐ越まゐる。石橋ゐ建ー

窄都婆く人ゐもれーとそふ故ゐ。その姓名を写さ称と。五輪の上ゐ一郎あれゐ。えも忘れべうもあらぬ。原来千歳ゐ生ゐ活が靈ゐてぞあくん。ぬるー梅魂の幻ゐ生て山路ゐ伶俜る夫ゐ斉眉りのゐ。ば按司王女を撃ませんとて悪根ゐをゐかるーこれも又曚雲が幻術のゐと不審。ぬるくゐねる不審と。ぬるくゐも疑ふ七妻のもゐの窄都婆突立て右ゐ方ゐえ入れど。ゐま疑ひ散中ゐゐ。王女ゐもぐく嘆息ー。姑場の山蔭越来の石橋母廉夫人と生鶴が撃れー跡として途ゐ外の作善とおりほえそ。悲ーかりしがあくとゐ立ー窄都婆をうるぶゐも。外へゐて。なん人の為陶按司が建ー窄都婆の物ぐりにおりひあひてうゐ見ゐへ。それりけりと曙れども。かる不思議のゐ心とも。ちらぐそ人を疑ひー。罪いと添ー。と宣ふ折うゐ五七人の猟夫ホ二人の荒男に

松壽
疑れて
千歳を
砂る

索を破て蒸火ありてふしつ。松毒が門迎ひ引揚来て。こゝ逸況て童示し
ゆう。上座ゐ在そうろう八郎按司と。王女ことそはしまんぞされ。僕ゐん猟夫
みそ。甲橘。乙柚。丙烈。丁炎春ゐんどほくりのなりさ。のあじを東風。
年の陶松寿ゐりさんあらふざうし。年来嚢雲ゐ暴虐に苦しめられて。
そうろうぐあくの活業も得せざ。八郎。王女の仁徳を慕しくゐりそ。猟夫
ゐん所在を索んゐゐ鞍計の猟夫撫犬いひあのせうのふし
良人へもどしせを潜んゐゐ樵夫ゐれ實そ八郎按司と謀りく。大臣
利勇を誅戮せ。東風平の按司松寿ゐり汝達いう〳〵逆状去く順よ思
そうろうぐあくゐゐ。ゐれ志を述。宿直して非常ゐ備ゐ人名をも
揚。家をも起さんるゐ只この時おこそといふよ欲しく。俄頃ゐ鞍計の者
ども次ぼび集會て。縁由を告ふるに辰平玖馬頃宗来小八申大七
といふ五人の猟夫従りて。何処へうゆきそうりけん。緯半はしてこえそゐりね。
彼り告首をれてとりやといとく公りとるさゐ馳ふること次後ゐーく。
まづ者奴ゐ往方次索ふに。松阪のほとりみて。この来小八と申大七ゐ
立をくこになりふれゐあひれ。されいとて矢庭よ縛めゐ。辰平ゐ三人の
往方いうゐこ責問。このりのごもせ苦痛よ堪そ。吾們五人諜しあひ
宿へ赴て又おのれら主人ゐ。そ毎く綾の越状越来の土官ゐ訴んとく。
辰平頃宗玖馬ゐ。窃よ為朝ゐ刺殺して。王女を生捕ん為ゐ旅
この処まで来りゐゐ忽地後方より千歳ゐ声しく。汝ゐ公をあーく
りちて。仁義の良れゐ冠せんとなりふ。翌をもまこび立地よ。よれ死ざまへ

するまじきぞ。辰平玖馬蝮宗ら。そやつら良人を拐かしうと喋びかゝられてえくゝれが。多足俄頃も離麻呂て。一歩も運び動かざるもあるぞ。丸扶るんとな。押立る女うしし。今さら〳〵ろくべ慈よ惑ひて。三徳兼ふれ大将死亡ひなゝくんと謀りふれ。天罰かくも速るか。と吼面ふせて賠話るもをしく。直ぉ辰平ぉを追ひ留んとさく。駈て推へまーしること叮嚀ぉ漏をりこる一帯ぉ居るぐれうる名主従これをみて面なあしてく嘆息ー。さてん千歳ぃ瞶雲が幻術ぁいあらざりけりこん苦悩う負魂の。窣都婆ぉ憑ふく良人ぉ斉眉丸負節忠義を盡をこと生る財ぉもいやませ紙神なふぬ男ぃ疑ふこて夫ぉ逼りて殺せ〳〵情なこと恨こけん。死こその後よぬれ衣こ被こる例をぁ日本ぉも傳稀なる負烈の女の鑑とするべきに。まるうたらくんの幸るきこ。

過世いろれ報ひ欤とこゝろ。いひあかさんとぉもふ誠ぃ言語よあらられて。赤せんをべもなかりろこと且ーて為朝を猶夫ぉ死ちふ〳〵ぼびこー。汝ぉを些ーてやうせぐ。千歳をぃ殺せざりつ。彼ぃ黄泉の客なりとも。その誠心をうとかひぉ。賊婦悪婆と罵られ良人の刃にかゝをぬれ。今般のうう推量れぐこゝろ為朝ぐ。箇様ふくのありこそ辰平玖馬ぉホそ駭然こ或ぃ怪こ或ぃ悼こて。感涙ゆふ拭ひあくぐ。そぐ中ぐ甲橋ぉ渉うちうみて班を出。真鶴命婦ぃこゝろ雄しく。暴ぉ王女の中城

笑及べと。偏目なりこゝろゆも佗人をそ
良人の寵愛苦紙慰こと。これをこゝ世ゆ稀なるに。こゝゝその名を千歳
と称して。偏目ゆなりしかこゝろ汚穢。賢ぐちて誤れハ舜天丸窄都婆
ゆ指して往昔もかゝる例あり。五體よ象れ五輪の塔婆ゆ木の節一つある
故ゆ偏目ことゆりゝるゆゝんと。諭しのくハ陶松壽も。こぼれ栗を撥はし
て。彼耶鄭の五十年ひとりそゝてこれ生ける鶴が。共餌をこゝた食残を。鶴の
齢を象りて。千歳とゝ名告れども。命短くなた魂の。假ふ姿とあらゝゝく。
添ひぐゝ外くあくこれを松壽とありわざら。なぞ愛おざも告ぎりし。名
のこゝ朽ね枝庇。おぐし宿りゆありなぐら。舊の妻子とあゝぶされた賊婦
のゆゑゆ敢れ。どぐぞ狗賓ゆ階る欤と只管怨こて衝うけゝこの宝劔の
威徳ゆおくれて。おぐしも彩をそぐめあくぞ不立文字の没字牌。殊れ

像見ハ正木の窄都婆外ゆゆる絶ゝく云一物。四大破れて本未空ゆは
久、ゆるこゝもおぐしゆけ。おんゑが没後の誠ゆゝく。これも面をおこせ。と在
けるぐく物いひうけて。注ね歎き死ゆひゆれ。舜天丸まをゝ嗟歎」て。
羊少けれハ智も浅くく。人をこゝれてこと。よくも察せだ。かゝる夫婦を
疑ひ。親をそふの故ゆあれと。頬ゆ汗ゝく羞る。ゆ堪ゝう後悔
そこゆゝちがひと人を賞るかゝとさふ。紀平治ハ瞼おぐこゝた。一人
田土と家ゝたれ。牌を送ゝて拾ひ。今霄の宿りを由縁の家と。
曉ゝたべきゆゝんゆ。あゝく判じて忠臣烈女を苦ゝゆ」ハ稚君のおへ
悦ゆのぞこゝゆ。これ老の僻るゆこと。と賭活ゝかゝぬ招魂月夜鳥も
梢をゝれて。良れ云常死告るやと。王女をそ空死うち仰だ。おゝく
ゆゝびゆこゝかゝ。そふゆつけて痛ゝた。ゆ魄が身の形なさ生る

むかしの山雞の尾上隔て七年あまり。良人とひとり臥房も入くぞ。死しても今亦妹夫の契り浅縮ぶ仏の露も。そうるく草の原も残もいくぢなくも。魂鬼いまだこの土をあふぐぞ。ふたゝび姿をあふしで夫とそひも遂ようし。とかたに説まふあぞ松寿を面目なよあまさぶ。忽地形をあらゝめて真詞、うつるかいうぞうて悼をもつそかひなし。既おその誠心をもろ〳〵おもれてかくまでも。いとをしこおぼそるゆゑ魂もさぞ本意なふ冗岩も物いふの謗あり。こゝいあまりよ端ちじ。と玉女を諫めて恭〳〵。鶏丸の宝劔を為朝も返〳〵もねふとそれが為朝これを受とりて。劔の徳ハ自ゆ衛りねーの意も随ふりのみ。さるよふんて。智仁勇あれり雙言と伐り。狐疑そるりのハ男方ゆき伐るこれらの夫婦を賞せん為又今霄のゆとりて後の誡とせんふ。

鶏丸を更て。生の舘の太刀と鳴ぶべ〳〵現ゆやろふ日の本の血著の窄都婆を亡骸ゆ。代て山路ふ瘞ひじ。これもろぶふ送らん。只この窄都婆と亡骸ゆ。代て山路ふ瘞ひじ。これもろぶふ送らん者の窄都婆そ。つろ疑念よりおれと。老婆が愚直より地妖を脱れ。今ゆ舘が血をそ。竹塚よ立出て甲橋。乙柚ホふうちち對ひ汝ホがろざ〳〵を賞をふあまりあり。ホんよ扨揚れとゆくぶ。そくその処へ走くふれよ。て云却便なしこれ亦雑兒ゆ追鷹ふ命助けそるさそじ。縦汝ホがまたび来小八申大七ハ生の舘が追鷹ふ命助けそるさそじ。縦汝ホがまたび来小八申大七ハ生の舘が追鷹ふ命助けそるさそじ。縦汝ホが謀れがとて為朝を撃ぬんや。不義の富貴が願ふくふ。を毎〳〵瞶雲ホ告ちじ賊軍の郷導して。ゆうびゆ生もまよひしと仰もあんじ刀城抜く縛の栄切去のくべ二人の悪根首を叩れて数回拝伏〳〵。吾們既よ

自の非をきれが。何地へも罷るべき。あもみけり。かくて為朝いそがしまくべへ。王女舜天丸をもよ宿りと出て野辺送りして。罪も極楽のうちなくばこそかくふ。死窖都婆引捉る紀平治が。先へも立ど逆縁の松壽ハ神の恩恵そくを。今更ふ冥加ありてかれ亡妻の年忌をく後の葬ふ棺よあふね松原茶毘の煙ハ峯の雲舊を石清水の水葬と。今あふそろて墳墓や。玉を瘞めふ越来山古跡を遺を夫婦墳の由縁ハ浮の巻ふそそう。

第六十二回

城山中ふ毛鶴寃家を張ふ
天孫廟ふ阿公首級と贄とる

屏風ハ敗るゝとくども。骨ふは存ぜ。忠臣義士とくども。志移らぜ。さても鶴亀同胞ハ長川の敗軍ふ辛ど圍ゟ殺脱大将軍の往方を索なるふ為朝ハ嶋袋ふて猛火ふ焼れ大里の城さへ落されて王女もそや焼れるひねと。笑えうべ。送恨の涙禁めあくぜ。せめて顕身の息乃内ふ阿公が所在を索ねて。母新垣が曙雲が生れを窺ひ仇を報ゝとも報ゝとも君父の恩ふ答んとそ。遂ふ佳楚嶽ふ身ゟ躲し。揃箭を負ひ。半弓と挟ど僅ふ禽獣ゟ射て露命と繋ぐ。とくくそれゟふ。その年も暮れり。かくて二月の中旬よりかぐ。有一日陽がいふ毎う。つぐ同胞不思議ふも存命て。泳山の奥ふ隠れをれバ。敵ふもくれぞとくども。亦身方の兵ふ環舎ようそがもし千餘騎の軍兵が一騎も残くず誰れるふもあらば。我ふ等しく存命て時を待りのふびやハ浮世ふ遠く潜ぶ月ハ首里の風声を竹くぶふも。たゞれなきをいふせんおりふよ。真和志間切の名なり中山首ふ属を

城山ハ一名を天嶽と唱ふ。峯高くして。樹林深く。人跡稀なれど。首里へ遠うふだ。これ究竟の隠宅と。おもひ。越えゆくに。これハ又西のそ。読谷山より浦曲を繞りて。件の山中を再會せん。かなふだにも途より西のそ。街道を走りまふす間切毎に新関あるん。草にかくれ将場の雉子も。声ふれぞ人かと。路もふれ踏まよけ入ふだ。日数経るとも忠孝よ。そひ

つる鶴を亦西の捷徑に赴きぬれば。亀あん二日先ぢて城山へ攀登りし。が。巡谷羊腸として新樹も暗く。何処を路とも定め得ぬ徑。彼此を徘徊もとく一両日を過ごせども。いまだ亀あん逢ざりければこの山を山氣立ちそえて。靄ぬるく。花ぶ鳥ぶふもも稀なれば猟人あれど獲なく。花そあれども果をえざるといふう餓られば弓杖を携りつ。遥よ谷蔭を直下せば。谷川の後ありて一汗の草舎あり。かゝる深山ゐ住む人もあれば。あるあやと訝く。趨て藤蔓にくま繰着れ巌頭ゐ足を踏うけ。辛じてその処へたどり着。門辺よ立て宿りを乞ふあゐ草舎の内より。年才ゐ八だうなる男の童大人一ゐ。もん匁いろ出してうまひとえ来浮世ゐ遠く人倫の住宅ゐあらぶれ。さつゝ。命立地よをるべし。あゝ」ゐ鄭ゐ出てうが。

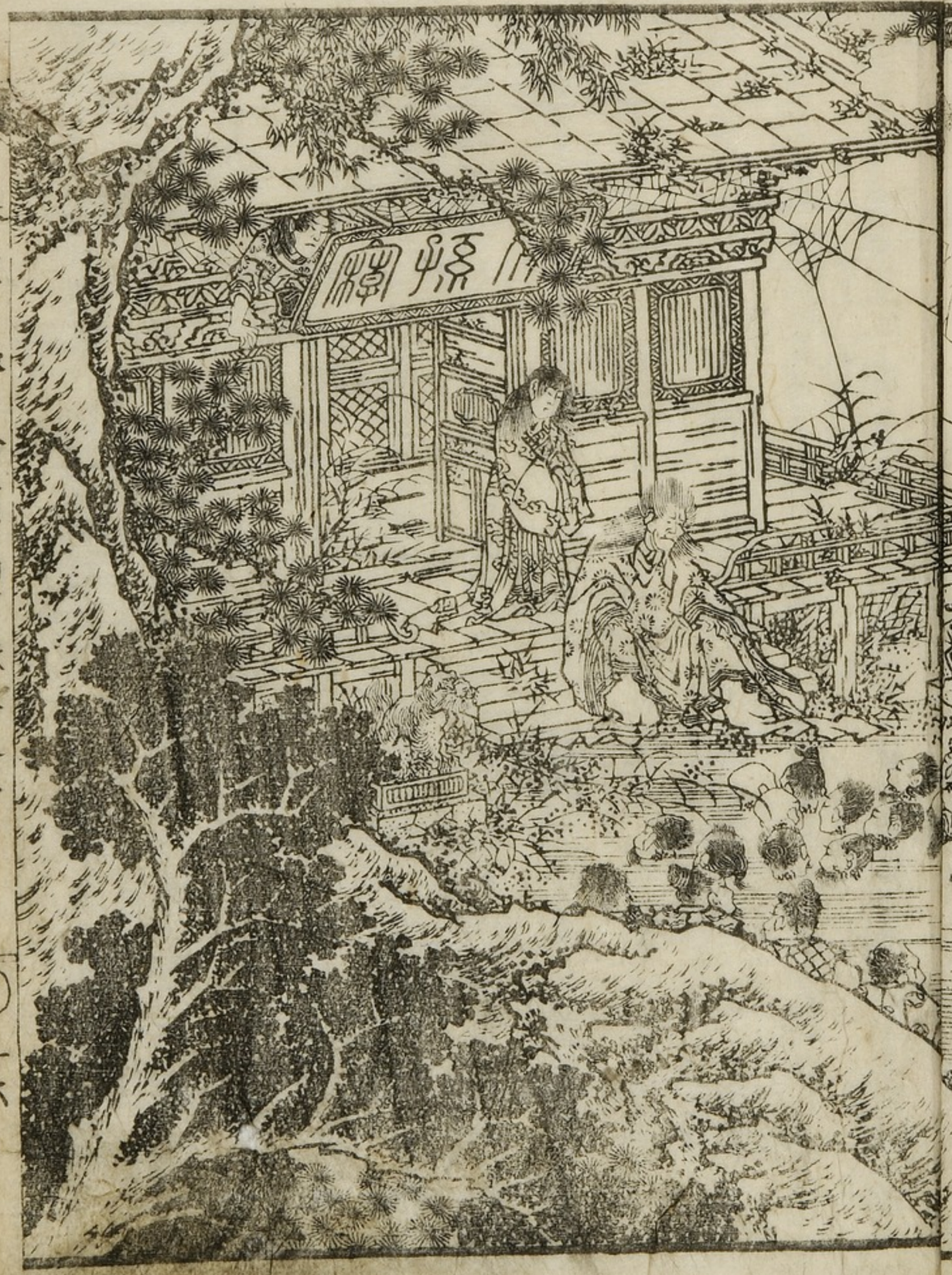
いまだ掛ふざるで幸なれ。さやくも走り去ぬ人ゐ」といそぐせゐ鶴を変もあんごと大なる怪こつゝ尋思るに。現ゐかゝる山家ゐ藤蘭うる男の童のひとり笛もるてあるべうもなふんぞ。これ正ゝく山の神ゐ役ぬる。二郎五郎なんどいふものうん。ちうとも壮士が。命とくゝあゝと笑もおぢして。不覚ゐ逃も走りなんぐ。身を強て宿りをえざやと思ひしが。好うび吾身を着れば父君の讐言を外はして危たゐ近つくん不孝なり不忠なりと。そひうくして童子ゐ對ひ匁の為ようぞ笛られ給ぶ。遇ひ柳个ゐ両漏る仏地こそとれ。某漫ゐ此山へ迷ひ入りて二日あまり経過せしゝ餓疲れて速ゐ走り去るべき氣力ゐ匁なく。餓を凌ぐ恵を忘るべうぶ。と乞れゝ童子ゐうち点頭ゐて双の掌ゐ椎子を溢る

だうりて生つ。この処より五穀をしこれまいるべうりやといひそは
生せば誇ふ腰なる餉袋ふ忙しく受おさえて。その恵をよろこび笑え
舊の尾上へ十町あまり。立かへりつゝ赤ふ母う。今の童子が而教へ
何となく氣皐くこそそうり。その羊才を推量れへ阿公が棄ひ去る。
王子と同庚なれべし。ちうとぶ彼草舎ふ阿公が隠宅ふやらひ。ろひ
あふそれるもの逢くて。他よこそこそ鈍まーろれぬくび彼処よ赴て。
あひじがほるを張みぎ。ちうるぐ。とひとり点跡赤谷蔭へとりく入せ
ば。日をもや暮く月いまぐ生ど忽地ふ路ふ迷ひてしゆけどもく草舎を
こんぞ。こころまもそく。鷹燥く。左欽右釈と同へふも人跡絶る泳山辺
を彼首へまり。此首へ走れば。砾よ跌れ荊棘ふ足を傷られて。身さ之神も
労れーぐ且く株ふ尻をうけて玉鬼の走ると俟ぞみ。ふ中の月やうやく
ふ峯ふそるれく昼のごく。と明くなる。隨ご頭を廻らして彼此を
見くれい前面よ一坐の古廟ありうち仰がてこれをこるよ柱斜
に甍隨簷傾えて寄生真高く。石像の狛狗傾き倒れて谷へ落さん
とそれ雛獅のごく。木偶の陸身采ら剥て釜より生る餓鬼の状く。
懸臭もゐしく梟の糞ふ塗れ。鴟尾いとづくみ蜘網よ纏る。僅よ金字
の扁額のこ月影よ耀きて天孫廟と写ーられいが鶴を忽地ふ多と起て。
ほうちくまりつ原来この神社ハ豫て笑く天孫廟なりうり寂ゐ
つぐ國の宗廟よまーはせどもも逆臣妖賊がるふ國家敗れてくくー
四時の祭祀を廃がいとうそうせ荒れ果て狐狸の棲となりるる茅平
の附なりせば。一トとびいとふべうり」ゐつぐ同胞を少くより國難る多ともき
か移てるくぎりるれふ今ゆくりなく宗廟を拝ーもるこそ幸な是。

とひとりごちつゝ草紙とりたる石滴を掬びくゝまを浄め壊れたる階を
登りて再拝して念ずるやう〳〵く世ハたゞ浅季なり及ばざるといへども神威今なを亡
のうへに微臣が忠孝の志を憐みて母の仇人阿公が隠宅へ導きたまひ
風志を遂さしめたまへ。もし王子を害なひ奉りて為朝王女の素
懐を果し。瞬雲を討滅して廃れたる國政興さゞれば仰ぐところの神明い
擁護ましまさんと牙を平伏して念ずる事半晌ばかりやゝ頭を擡
不知案内の山中なれば通暁素めぐらんより神殿を一下拝さまほしくて翌
つとめてこゝ谷蔭の草舎を索ひ立あがり猶て扉をおし
かけ〳〵扱ひ内へ入らんとするに杜傾きたれがみや力を究めてこじ開
ども開かず。せんかたなくなりければ簪下にさせる白鞘の童子刀をもて椎子を
とり出てこれを噛お餓られば味いふべうもあらず。ろう有かる艱苦あるも
そひ奉るゝ身の悪なくしてこの山へ〳〵まよひしとをも懐愛さるゝ
あり鶴の遥おこれをうえて人跡絶たる山中ゐ小夜深て人影寂ひまゐ
ここそこゝろ弱悲しうる國の宗廟天孫氏の宮社も山賊の寨となり
けん潜びく物の吾悪をうんだやこゝ彼此をうえ久敷ゐ神殿の扉開されど
身を隠すべき隈もなし。とある方のうち向上へく弓弦を銜破れ簡子
楣の上よ攀登りて額の陰ゐ躲れてをりさる程よ続松の光りちかく
うるさくに荒男ホ五六十人皃に衣ゐ皃に頭巾を戴き各脇富ゐ
木戈の脚絆して長刀を蹈ふまに火を抗て右ゐ

人の首を引提古廟のほとりに駆ひまの軈て続来るうち累て無火
としられハ天結陰くらく暗くれどその火の光りも八方へ照らして毛の
穴までもよくそつぶし当下戮の荒男ふたり二帯を居なげれつ一人班
を生く社吹かける巨木の虚をさし覗き君ハ渡御ありや縁て仰せ
奉りうほ祭の数を持こあせり。生きたるへと啓されば虚の中より癸
ちく〳〵年の齢ハ七八十でうなる老女り雪より白き髪うねそぐばつし。
大和錦の袴〳〵て緋の袴の裾みぐ〳〵ひとし八才ばかりの男の童のまた
摘て徐々ろ歩こ出上座ふ推なほりて半朽損ける階の上へ童子をくゐた
居そのまへ中股ふ尻をうけて左右をうち足り面魂物凄じきまで
ふいと逞し。鶴ハ扁額の間より足ぬこれて且怪こ且畏びこの男の童の面
新ハ鬱ふ谷蔭ふる草舎ふてそれふ椎子と称りてうりのふたがらぐ赤

彼老媼ハ紛ふくなれ。母の仇人阿公なりてこそもいくふ。とち駆く胸
を結めてそよ。かれが童子ハ阿公が棄ひ去ける王子ふ人草舎
みそこにハほして。いと鶏蘭ふふりのうる。王子ハさくなりうれも又面
忘れなれハおん隠宅よをありうぐち外しくも物いひて立ち退しこそ
悔うれ。おうに今夜をうぐひて。母の仇人阿公副眼下に歩も歩ける
王女鳥朝の志を。言詳よ告まうる。同胞の誠心を。天孫氏の憐こおひて神灵こふ償ひうる。
一箭ふ射て殺して。王子ふ徴臣が孤忠を弘ようぐ自の為ふおこなはざり
野伏あをいうふせんうれ立地よ討死せば誰ふ王子よりぐ忠孝こ於ける
のあるべき。加旃。ぐ米こふあらぐ。それのこ仇人を撃りとぐうさそな




天孫廟ヨ
阿公
首級を

わかなく忽ちに血汗流て投る所の器をとりてせぞと云。古人の金言既に仇人の
なれが隠宅を探り知りてその進退さへ定れば。袋の物をおくが如し。と早くも
心をゆるして練りて。その音もせば闕窺ふ。阿公いかれもふと左
右を見ぐし。豫て分付る贄の数不足なく准備して欽今宵の
着到誰くなるぞと問ば。衆皆跪を低さい國場の東紀松川の南吉。
安栄をしじめとして着到をべて六十一人。命せらるる生首ども。時日移
たぐりて参れり。受むるめりと。下ふぶれべ阿公は顧りてかさに
八十一つれど。一級足ざれいふぞや。きりとていひびるし陰裏ハ
りてどふも高く虚氣くよといひ懲らせぶ。ふりともも頭低掻き。

俺们四五日已前より。真和志の属村いさらに長川のほとりまで毎夜ゐ
徘徊ふれども曚雲処くゐ関を居て人の夜行を留ざれば。路ゆくりのく稀
ありて。八十一の数ぇ満ざ。僅ぇ一級缺ふるぐ懈ふゐひびぬ。今一両日をせべ。
その数百ぇも満ふべし。と啓をれば王子はいとぶ大人おせ
ふやよ阿公九ぇ世代知せんとて三年ぉ及ぶ艱難苦労。その志い善しされ
ど罪なくの首七刎さ祖神をあふるこもまりを
ふゐ止ねしと宜べ頭を掉倍歳ふ
あハ野猪の肥七十あまり代贄とをる神ゐあり亦武者修行をる猛者
ふ國くの神社へ首級ぇ向るりのもあめり。今この贄もそれぉしく人参
果の神事と名ばくされバ往古天孫氏跡をこの山ぉ垂ぇまひーふ。
載ハ一万七千七百九十餘年。國王ハ王子をかぐして廿六代の今ぉ當りふ。

待伝派云。城山一名灵嶽。注伝旧説云。板屋一區あり。今ごぐく廃ると即ちこれなり

妖賊ら世に陝うれ山林に脱且のがれ人ども君をうばゐて天孫氏の正統ハ絶てしこの時君臣心をあハせて祈ぶ感應あらんや。この城山を天孫氏の威灵天に表して一名を靈嶽と唱るを。やひあハとそれがいともかしこし曩ゃ王女を賺らくて妻とし毀り。日本の浪人源八郎為朝が物狂ひして寧王女を賺らくて妻とし毀り。威勢を權て利勇を殺し王子をさん我ひなんと世とをる扁口を脱れて二年のうかまて玉體恙なくはゐまして祖神の衛ありつるぐ赤彼為朝ハ貪れどもみは飽を瞰雲を軽ま滅し中山南北の三省をごぐく有人とて却嶋伐あて焼殺され王女もその日に辱められ人ハ猪武者の尾ま著て亂舞せしを戻ふやくこハ天の四訓をおこ亦王子の威福もて國恩をおりひ恥をもるりのハ草命の時を悲こ山林ま脱れつ。招ともかくのごく。王子ま従ひもれバ瞰雲を滅さんこと今より三年ニ六

まんべうふたゝび仏母をくそひまつらんと慰れバうち点ぶ辞そまをしてもまくと只痛しれハ姉王女大里山まて殺されまふと伝へまくふ世の中形みし又為朝そ日本ま稀なる勇将忠めり我あり。と風ゆもしかふざりせば。その下風まうん松壽鶴亀いとで瞰雲が類ふるべこれらも今ハ残ふつ。討死しなるまいとをーとうち連洲のみそ。阿公ハ声を激ー幼稚ま手せバとそ。おん牙の仇ふれ王女為朝まと。いとをみまふとうハ兄弟位を爭ひて戦せーこと日本ゆも漢まもあざれる世よりあり這奴ホことぐく。瞰雲ま殺れハ疫病の神をりて仇を報ふるとふ和俗の常言ま異ふまふぶ。いひひなれて宜ふまふ鳴乎むやしと嫌ーこしらへ赤裂へようち對ひ汝ホ其処よしうもでも。跪ひてそれバとそ足ふね贅ふ地より生んや。闘錣樹谷の隠宅ようこの処へ等出路を掘らしおふ宮社へ詣ること。

閘鑼樹ハ大明一統志巻の八十九琉球国土産の條下ニ云閘鑼樹ハ福ニ似テ乗窓ニ宜シ木邦の人ここらふかき葉ニ

そふ百日に満それバ結願の贄をまうけ。ふせんとふしてふその数足ら称ふ。
ゐよかしこて快くらひとかくそ更闌ゆんニ至ハ罷りて今一人が首と
切くり持来れそのゐいろ等閑ニ
そこそそくゆれねといそがしふれバ阿と應つて。淮倭の続出ゐ出
て舟火まさしうし。こゐれ先へと群ゐらて南の山路へ走り折ふ驟雨
の風と降そそだ。おどろくと雷鳴ふ雷電つしてハ阿公のここの隙ふ宿志ハ遂
ぞハ何の時そ期とべとふ人定めて紬まと揚花下んとそうしが。
舟火ハそや降る雨ふ悉うち滅且て善悪もそうね烏夜となりぬ。

第六十三回

阿公を救んとて。王子ふ傷けもれバ忠ふふ。又孝なるぞとく両腎
て月も生よとふふハ似ぞ暗そより。暗そよ迷ふ壮士が。かごうち放そ
焼刀の鞘を握てこもこうり。

果を談そ解手刀　因を推一果を談そ解手刀

小憂時して両歇ふれバ。累ふる雲の蔭ばくまくに月こそ生ゐ。
ゐるうこと。おどろかば。誘ハ窮ふ誘びて野伏ホが立ゐハ後悔ふふ
こちらにし。名告りけて撃ぞや。ふふ定る折ももれ忽地前面の尾崎
より。蕉火の光り二ッ三ッ閃れ生ると見ゆ動揺めく声の騒ーく。三人の野伏
ホが。ふりの旅客を捉つ。まを取り足をうん絡ふ宙ホ引立て喘く走り
来れバ。阿公へ。王子を忙ーく扛おろして階の板を半をりこち取れる者ハ

津嘉山の平覇仲井間の宜壽古波藏の安棄ふびや時をうつさず抜群の働れ賞そゞーく。這奴何処より生拘まうると問ざる人もおそも彼旅客を磔と引ゑて昏ぶ丑人跡絶れ山中獲あるをうかゞざりしが仰黙止ぐゑれが裏皆八方へ部ーつそゞ中ゟ吾儕二人この山の尾のあるをなれ穂屋のほとりを徘徊それば内ゟ鼾の音もうり。それとぐり火矧抗てさし覗けばこの壯佼前後もふびよ熟睡もされど矢庭ゟ彩ゟ稀なる獲ものゝ活なぐらも庭ゟ外面へ引撮ーー首を刎んとそゞこそ初めの時やうつると索をもて被を縛て引揚てまわりとゝふ間ゟ壯佼を捕ーし臂をもれ久さんとそ小膝を衝くたまくそれども鳥の諸羽を縫れーごく押縮やられさるび。嚱のこゝろもてせんをぞるし阿公ハこれ斌攻笑ひ呂を以て黒毋なる乳歯莒をあらはしてうち笑ひ。その数缺さるまの贄ゟ。神慮もおぢつなりし。ゟ忽地満足一つるゟ。念願成就疑ひなし。すゞそやつゞ面をうんせよといくバ蕉火さし著る火光ゟ額の背より鶴ゟ脳窺て大れよ驚れおりひきやつゞ身仇人の乃母生拘れめくく命の終ふんとゝ兄をこゝにといくゞそゟ。いくでう身を整んべれと。密ゟ弓箭とりみはし且く隙を窺ひけり當下阿公そもちく進そ壯佼と面ゟあしてりうともにうち驚そつ阿公そ亦一毛動ず二男亀なふびやと問せも呵ゝと冷笑ひ汝ハ曩ゟ誅罰せられし事を忘れぞ。あくを歯を切り汝いまごれを忘れぞ。お軍敗走しその日より存命べくもそれほど毋の仇人を狙撃んとおりの遂んが為験そあるゟ似られども汝がちゝにありともちふでゃそじめて

のぞみまま。登る山の峻なるまゝ〳〵疲れ夜興〻く菰屋よ熟睡せー。不意を驚かれて生拘ふれ怨を泉下まで遂ることを天るる邪命なるかな兄まひとり宿りにあふぐれ睡るとも兄へ告んや別まに日数へ狂孫程どころにまが驚るとも。あふでや索まふらん仇人の所在をつぶ兄へ告まほー。もふせまじ。あーれ公へりこるに過世いうなる悪報あやつぶ同胞へ天神地祇よも憎れけん。おのれ世界の月も日も。かくまで照くふし。まろね狭と声死ふるし眼を睜り蹉跎ーてへいくそたび走りかくらんとそれが推居るこ人を掷よ被られて泥よ塗〻〻両後の場。雲脚近くまでそれね恨の眦血をそゝ〻腸を断孝子の怨言やゝ〻てうちち咬れ。あるがのや。置ーや。その阿公へ王子の妳母世とそ時そ。君りろともに寡くとも老くりとも汝ホう公刀落皮一寸切りるんや。とてもかくてもも屠児が羊ひがう忍びをさせんより生乃根断てるさせよとうひつて左右兄えれがらみあるると惑もあくそ手覇ぶ引」抜く刃の光りまやよまて。もどしまるこどそと王子そ忘ふまひ禁あ隋阿公毛国掛へ国の忠臣。その子ともまをあくなくも。殺せんへ不便なり。命助けてるさせよと孝子を憐む怜悧さへ八才童ま稀ある君命を耳ゆもうけぞ氣ろを変毛国掛をお居なりとへ何人が告まかよ世忠臣ホもわれ逆臣ゆもあれ彼へ罪ありて誅せられその子ともらへ君ま殺せ」為ふ邪ホ媚涙ひ剰阿公へ母の仇人ぞんどくなることへふて人を惑を癖者なれが放ーがに」彼も是もこそ王子のおんゐ。おーれとてかくいろんや。人こそ多れ今胥の贅ま亀を獲るへいふへ人の亀の卜部ま世吉瑞幼推くとも君へ君。女ーしたと宣ふりのぞもみとて猶旅せー。首ふ刎よ。と下知それへ脱まかとるの下に立。亀が肘が左右より引捕へく推

その時乃前帙第三巻誌鳥の巣山と亀兄を救ふ條と疑相似より亦是水濱俗ふ亀吉知深が林沖を救ひ出すと恭吉が盧俊義を救ひ出すの趣相似ると一般難易優劣見被ひとあれを執向とそ

うわせが平覇が背後ゟ立縋て目さゝへ突出を氷の刃城内りと引てかゝれ古廟の廂ゟ強音して平覇が腋壺兵と射る矢四五すあくられて叫びもあへを仆ゟ。これと駭く安架ゟ二の箭ゟ吭射抜れて仰さまゟ反りて敵の刀を掻とりてあく宜壽が首と斬へ亀をゐるうと刀を跳ら已つゝ抛下ゟ吐嗟と驚くうちおとせを拾ゟ半弓投てこゝ刀を跳ら已つゝ抛下ゟ吐嗟と驚く阿公ゟ亀が不思議ゟこゝ脱れて必死を救ひしゐるの趣同ゟ一般難易優劣見被ひとあれを執向とそ

勇る声をあり立名告ゟびさも亀ゟ兄身左右ゟ立てゐられて阿公を央ゟ包ゟ鶴をゐるうと。そひうけとそうりた

去るとそれを打うけられ銃視ふ紛ふうちに母の像見の解き刀鞘ふ黄金の錠と亀富蔵河のほとりふ在母新垣が拝まれるひ一亡骸ふ乞ひ腹なる児とこの短刀の失されば証拠ふ為し汝ふ母の仇人なること既よ瞭雲が口より洩らせば大うこへもるといへども虚実を定うまじ一ふ奪ひ去れ一母の刀を打うけられて疑念をもちふも實ふ汝が自業自得。かくてもぬぐひあへぬ亀も赤ら捉一血刀拿ふ老賊何の忠うあらん。その刀の罪を脱んとふ幼君をそそのかし山林ふ躯れ狗竇を集め世と迯人を欺く癖者今立地ふこれを討ざれ誰う忠孝の人といふべき。王子ふ遍て刀を受よといふ声さへふかひびしく拳ば斬らんとよせあふり阿公ふ證据をとられて脱んとするふ言語なく面色赤く成若くなり歯もふれ歯茎切りて脱あがりたる額髪の針のおどろくなれ

そうさまふ振揚てふまくる眼の光り星のごく炎のごとく息を吻て今ふ何をう置むべきその短刀を奪んふ富苑河のそうもて孕婦を刺殺」走り去るのうしろより返撃ふせられと名告うけつ懐剣を閃り抜て打かくるを汐うと跨ぐ受とも拳太刀と押し退けつきりもふ老女よ似げなき棟の太刀をら右を拄つ左を撃つ。いとも烈しく戦へば王子ふ遠て堦の上より走りつ彼此と立続れどもせんべなく連添うる声を揚て亀と母くんぢ」また阿公ふやく迸よし。いと危し。とふ久る阿公より猛く勇める跨亀もやゝ怯み初ふ拳うまる。刃の陰よ阿公そ足を蹈て燃ちまれ。蕉火一度ふ踏滅せば。忽地舊の烏夜とかりて拳太刀さうに定うまじ迭よ氣息を候ふて丁と拳てふ迸くうれ赤拳

白刃は空を切りもとゝて目前へ突出て刀尖はそろびも鼻を觸めて刃を返すに只いとづゝも追ひ縋ふ須臾時をうつせ〻ば忽地叫苦と魂消る声まぢ一人は替を留ふとらめ正〻く阿公ありきてい丸まい駭れし欤くやつぐ兄を殘を負ふまふと心慌て仇人の声をもろ〳〵も礙と砍る太刀風の雲さへ吹や拂ひくんめふられ出れ夜はの月隈なく新とりうともにそれば無慙や阿公い王子を仰さ刃ふ引よせて胸前ぐさと刺さるゝ今鶴亀が撃つけられ刃よ左右の肩が砍られて流うゝ鮮血い泉のぬ〻兄も弟もの形勢よ驚れ呆れて目をあい暗れも迷ひてや阿公い王子と殺しもまれりこゝ猶ましてう孫今こゝに罪いと重れ殺逆の怨うさうる君の仇天罰必ひもふせんと左右より赤ふりめぐる刃をえめげてやよやまくく二人の孫よ鶴亀よ祖母が今般の戯悔あり。もぐふく息を継せよ。と

りくが語る亀冷笑ひ老耄て虚氣ふる欤かくても吾倘を欺く欤孫と嗅うもおぼえめふぴ。とりくが阿公莞尓とうち笑こ。もろ疑ふ理りも。なりとも。かくまで猛く撃ふんや今こそあうべつぐ素生耳引立てよく聴抑つぐ父母をそ〻せ一人い勝連の親方。法司後一品阿高とぼれて國家ふ由緒ある紳士が犯せる罪ありて鬼界へ流さるその頃つぐ牙いつぐ枝の姫松母りうともよ住ふ里へ勝連を追放せられ憂苦ふ堪を母い牙まうり。つぐ牙ひとりふ三年程て。せめて配所へ赴て父よ住んとおひもち泊の津より硫黄松よ役りありとめて彼処へ渡り父と索ぬれば悲〻れる。この春病て世を去ぬふとやがくに孚も絶果て鬼界が島ふ浪いよれども牙いよるべなく繋ね松さられど雄〻しく性ぬれいがらくまで



き
まうる必ひ生ひ薩摩洋へ推渡り何ようまれ一藝を習ひおぼえて故國へ
久
帰らば用らうことりやと謄太くもおひ定めて大日本へ渡海しつ大隅
國大泊お二年あまりさそふらひて唯一神道の奥義をうけ終便よき
く肥後お起れ阿蘇の神社へふ詣してくよ且く旅寝せしろ彼明神
のみやの背宮ふ弱官よかうくひようれいるみやめふね稲紅の揖を枕
の化ける契ら羞て名告ようびる名ももうびあひうえんまでの紀念とて即ち
差副の短刀をそぐまうりてうれせ一次の日に稀よ笑え已故郷の風の伎りハ
即ち贈りて果敢うくも起てうれせ一次の日に稀よ笑え已故郷の風の伎りハ
赦免の沙汰商船よ便船して。母ごてをなる琉球國官府お学えなれた。
ろご身ハさうふこなれ父が罪赦されて。本領のこが一ッ北谷の間切を返し給
り。大國の神道を受伝人ふ恩しりのことそ託女の長かなれーかば北谷の
女王と称られ夥の託女よ冊れ按司ふもまひ刈の富貴に父が汚名を雪る
れ喜しさ楽忽地哀この本ことくひ驚や。日本の人と一下夜さの契うら忽地
有身て月をかさねる身の煩ハものぶゆもなるものぶれをこのゆり一世ふ
笑えるび神おつうれ掟お悖くと官家の崇服れぐくて人ちよね胸を
苦しめ行行ごを産おとせ玉を敢く女子といて
不便ふ思ひくども養んやうめーぐれば。ある夜密よ紅抱きそ北谷の属村
なる濱川の里よ棄日本の郎が贈りうる。九す五分の短刀と極綵の紐
よ結そえて公つよくいなれぞもも涙よ路ハきりめくど。その翌も又翌去日
もそうこの空立のこうち瞻め。何処の人お拾れうる我の中犬お食れうと
思ひつつ送る日お夥の手ハ移られども忘れがされハ女児ぞゆえ孕れハ
託女の長夫りんぐきりのふぐ不遜よくうさそ日本うる郎へうる操ぞ

とゞめて壯を他あるに。よる年なこに生れ出し。大膽いよ〳〵愚かくりて貪る
ふいとゞめう〳〵慾ふ惑ひて中婦君と利勇ホが奸計よかくこゝろれ。賢明の孕え
まゝはせし王女をとひなふんとしてるゆふべ毛國舟よ着破ふれて北
谷を追れしぶ利勇が扶持ふもようて都のほとりに潜びてそう。ふほうずま
ホ中婦君の奸悪を翼んとて利勇ホと諜しあひ。民間ある赤子を竊こ
て中婦君の産ふひしといつせんふるものびくる彼此を徘徊し富義河の
とのこなれ郊原ホ病卧と女房が臨月なるをそや猜しそれが子どもを
欺て茶買へとてほとりを遠離孕婦う腹を裂きて腹ふ赤子を
引出ふ婦が今取よいとをこし短刀こそ忙りのどもう名をちるよとぶ
となりもせえ送しむくべて物ふ
を利勇よ遍ふして後よ彼短刀とつくそれバこえも忘れね。二十九年

さえつ秋。葉し女児が纖褓の紐へ結び名て遣る。日本の郎が像見の
一口ぺ紛ふ女うな兒鞠の詰亀原未ハつぐまに殺しそれ孕婦ハ藁の上
より捨し女児ホおりそれまりさハ浅ましそれ不行ちそうと百遍悔ひ千
遍悼やど。なせし悪業とうもかくらぞ隠慝の悪報ハ悲こ却強慾と倍
うつぐちとまりしぐ。ぬくくび三ふびちひくとまみ。女児が良人とそ定う
なうふ稼。嚢ふし赤子ハつぐ孫まうふ。此りの世子よまそれ琉球王とまんよハ
女児う非業の死ホ付て赤ゆくりなれ洪福まりと源念をそれで未憑
ちくそのうホぬくく隠して。孫が成長をよんつぐふまみ曚雲が幻術ホく。
俄ふ國王中婦君もむなじ日ホ薨れしう多くハ利勇ハ王子ホ代衛傅れ
南風原の城へ楯籠こ牛角の勢ひを張りのうちぐしくハ冠を
る好まそ。それども孫ハ王子新主とまる敬せふれ既ホ六年の月も

日むつるまにこれをちり煎れが牙ゐよる手ハ惜うぐぞ只孫ゞ人と雖も
を俟べ又あやまくに内乱ゐよろて大臣利勇ハ為朝よ殊れ一日よ汝
同胞それを逐ゐて毋新垣ゞ仇人と嫁びうけ前中城按司毛國男ゞ二人
の子ぞも。鶴亀と名告りしとそれよふうの孫とろゞ女婿の名字をだめ
てある悔しさ遮莫との王子へ話亀ホゞ筭え曝雲亡びて孫王子ゞ
國を普く御ふ至ふべ二人の兄ハ従一品國舅國相の高位高官ぞ
極んもいと易し説ゐくきさやと必くぞも。事急なれバ生ふるよしなく。
その短刀を鋭視ゐ寵を外して打うけ」ハ環のあせもあふん日に骨肉の
真を告王子の佐なうれ方便ハ暗ふらぬ支堂鄭ゐ平覇
安栞ホゞ不思議ゐ亀を生拘勇れゞそゞろゐ懐愛くろゞ胸中を
ちふせんとそひるぐらいひよるちべのなれまくに。その剛臆を試人とく。

皆を制よと下知せーを實言と必人ハ稚児の王子ハこるお忍ひう孫く毛
國得ハ國の忠臣。その子ぞもらをいうて洩せん命を助よと禁めふる。主オ
ゐいともませー怜悧さ。自然と憐む兄弟の情ハ誣ゐ誣ゐく。白刃の下
よありうぐらこれを罵る亀ゞ勇敢額の間ゐ匁を躱して毋ゐ救ひ訴
ぐ智畧これくいまゞ数るふぐぞ。あるとゐハ王女ゐ供奉して塚雲に生拘られ利勇ゞ為ゐ擒となれ
ども忠孝の志移ふゞ。天の鉢を打ふれバ母や。長川の敗軍よ汝ホ兄弟のこ
誓れゞ今ホこゐたれをえて毋の仇人とようせめらゞ勇士の廣言道理
ゐ稱ふその健氣さよ自の好曲を羞ぢゞ邪念の角も折れ孫ゞ導く
浅瀬川。ふれ忽ひよ濁りたと「ゞ」めて曙る天罰ハ尚寧王の徴ふねを。
王子と称して世を欺き王女為朝の討死を身の幸と欲びて。その殘業を

羽夫人はまむしの大なるものを羽夫の説いた後の巻にてしる

竹り製へ祭の贄ゝ假托て人を殺して賊をなした太山の奥の深山樹の根ぶりたものゝ強悪を細溪川ゝ影こえて清くそゝぐらふ活亀ゝ恵孝ゝ比ゝへ今さら悔〳〵恥〳〵せめて罪悪を滅せんゝゝ天孫氏の正朝の前ゝて王子といつゝ孫ゝ殺し年長る孫活亀よ殺れんと思ひ定めれゝ火炬踏消して暗たゝ紛れゝ此ゝ月を燭ゝこれをえよゝ影あうた月を燭ゝこれをえよゝ骨肉の真紅ゝ生血と王子の鮮血とひとつゝよりて八〳〵ゝまそ可愛さあまれど必此ゝ羽夫ゝもせ〳〵毒悪の祖母ゝ讖悔をゝ難麻れゝ定めぞ目ゝあてゝ涙を甲夜の

讖雨より。ゝは降そゝげと身の錆を洗ひ流さんそゝもゝ女児を殺〔又〕孫を殺して孫ゝ報ゝ因果覿面脱ゝね慈報ゝどて首を刎ざれ。とゝ激せざるも身ゝよつれ息の下ある物ぐさりに活甦〔嘆息〕つゝ外戚の祖母ゝて。ゝをそれよ〳〵紙ゝうらふ。いうぞう刃をあてゝうべき。善悪邪正へさる人の仏うゝそゝ聖もゝ人どゝつゝ同胞ゝ忠孝ゝ男ごゝ〔ひを〕ゝ贄れのげても。苔ゝそゝ道もなく。母の仇人と素寇ひ〳〵仇人ゝ母の又母ゝ。世をいつゝりの儲君ゝ亡父母の遺腹子現在身ゝあらんとゝ。ゝらでも脱ゝれ国家の刑法族滅縁坐ゝいひとたゞ〔ゝもいうゝれがかくまでふ幸ゝうゝふ幸なれや。父の忠信母の貞節世ゝゝらふれゞ罪ゝうゝ。討〔ゝ〕親を恥とゝもゝらふねゝ身ゝ王子の種を潜てみづ〳〵父の名を下ゝ又路亀ゝ外戚の祖母ゝ撃ゝゝ乗ゝうゝれても。年寿親を慕ひ〳〵母の

為ふ罪をまぬとこそ人作る天罰の禍ひ定がたしやよまのうち家兄死をより外をべもなし足までなりと同胞の草を刈りて刺錯んとあるうが阿公の慌しくえうりて声を激し愚ふの為亀ふよく迫るや自殺をることやめよその短刀ハ日本なる海ホが祖父の賜今これをりて阿公を殺をふあらばこれこそ夫の刃にかゝるべき勢ひなりとも國賊只一刀はして已とれハ海内忠もなく又孝もなき人情公道共ふ缺ふんを盃の自殺ハ忍びざるやと物いふ毎ふ濆る鮮血をこゑ呑ふ忍びそぼり祖母が首と刎ざるやうにて法然と斎を涙の雫霜と消るまもなく又消うとれ刃を卿こそ誅うまじ阿公を膝をりはして眼を睜と海ホこれを誅まじて瘧平愈をれとあり天亦これを許さんやその短刀をと掻よりて項ふ押あてつ自刎んとをれ折ふ古廟の内ふ声ふく老賊阿公自殺ハさせじ鎮西八郎源為朝ぞふありと名告舜天丸ハ松寿紀平治をわそ立出ふ人ハ亀いとで面ふげふ前ふ迎へく再拝し去年長川の敗軍ふ大将軍ひねとをひ定めて逆臣堪ぞ奴うくも歎てなりしふ王女りうとも恙ふくをひざる廟内ふ人ハこゝそこの人と恭しくそ啓をれハ為朝茫然をしてありがたく歎しくこゝろ有ら笑こそわれ嶋袋ふて必死を脱れそうぶ王女ふ環會佳奇呂麻人ふ伴れて姑巴嶋ふ赴て日本ふて再會しそ出生せ嬬男舜天丸及心腹の老壹岐より八町礫紀平治太夫ふ面ふ久ふ隔り潜び越来山なる陶松寿が居宅とあらぶそ宿りをそ松寿が

亡妻夏鶴が。一ど
為ふ。ゝ此山へ登りて天孫廟へ参詣ー。主従こゝを通夜祈り祝
風を凌んがお内より固く鎖しぬれば人ありとも
が進退窮亀同胞がる体これを窺ふに
ぞれが。亦紀平治ぐらよしありさる
をぐむやよ紀平治願ふまゝしてよ阿公が。分錯許をと宣へば紀平治
を階を下りて。まづ跪拝をうちまぼりつゝ嘆息し
昔の義の姿いうせて。彼も老さらぼひそのの
人のりとゝ却もちびいさゝ阿公跪亀もよくやけり。老女が今我の懺
悔物ゝうりて。ちひめそれがつれも本四十餘年の非をぞ知る阿蘇
明神の祭の霄宮ふ。跪亀の鞘ちる。九す五分の短刀を。假初ゝ贈り

さりし。阿公が密夫を。かくふしハ町礒なりつゝそれときあいさまぐの。
涸銭をゝハ世の常ゐまゝどこれよ定まる妻なるころ。放置れ風流士
るゝ私ども。袖ふりそゝ稲舟の。河の綱手ふ結ぶ化ー契りも人目
いぶせく名告もあ人ぞ。これハ短刀妹ハ巻軸。これ再會の紀念ぬと。
さりかしつゝ起つゝれ。家ふ帰りて淫婦が。おくり物を披てそれば。
琉球國の地圖ゐして。風俗偲言ふひるまで。奉精細ふ録ーたりこれ
奇るともありけりぞ先祖ハ琉球の人なるよしハ亡父のおぐりあそ
笑ふれども。書もさぶめしおいあくまで。
笑メまゐ」と宣へば僅ふ四五日経て。それうこと
牧と人も同れど。索めぐれど。索めぐれど。一ト夜の契りとさひえ手放て
後ふハ代と。呼ぶ女を妻とし娶り。淫浪のさうなきまゝふ。木綿山ふ

山居して猟夫となり、幸ひ八郎は曹司ふ値偶ちそまり。九國を管領ちのりの行ゐを召おろれ。二十八騎の第一と世ゐも人ふも、まことに真ふこよなく面目し。ちうふ八郎は曹司ハ君父の仰ぎ、こみて放せ一鶴をとり獲んゐふ。案内ちくるりのくふぶ。こゝに紀平治ぶとうち夜玖嶋彼郷導ゐに倶一ゐ人ハ朋輩ゐもうふゐれ輒く鶴の益ゐとら夜玖嶋彼郷導ゐに倶一ゐ人ハ朋輩ゐもうふゐれ輒く鶴を獲てなり。こゝこれ主の忠孝と神の憐ぶふよれど時おとりてハ阿蘇山ゐて地圖を賜り、淫婦が績なりとハ人もいふれど結捨るゐ縁一をこゝに忘ひ生れが短刀の鞘を更よ孫としこんとハちくぐぐそ遣ゐ。ゐ人ゐ二人の孫が善悪邪正と分よちる源ゐ組治と。秋津洲根ゐ二人の妻。二人の孫が善悪邪正と分よちる源ゐ組治と。秋津洲根ゐ二人の妻。これとりゐ。ゐ一ゐ縁一を白地ゐ。名告るも昔聴一と諭ちくとれば阿公を原来その夜の密夫へ。ゐ人ゐりしりるもに花も実もゐれ老樹とちひとん根ふとれ相生のゐ。ゐ人ゐ別のとぐゐりるもいうて面をありさるべれさふゐれ後の夫ゐゐりゐ只足のこが後母とし曲ゐる木ふもゐそ開く。僻るりのゐも信ゐつ。憐ゐまゝぐと昔の好ふこの世の暇ゐゐ一ゐ孫がこゝろをゐくゐ人と掌を合とれば路亀も諒てその名を伊及へれ。八郎按司の股肱の老臣八町礫の紀平治ぬ一そゞが外蔵の祖父ゐりし。ゐゝとうけるれ見糸ゐ。と名告るハ親の注ゐゐそ。王女舜天丸陶松壽も奇縞を感嘆ちくりれ。

椿說弓張月残編 卷之三 畢

落梅換雲子帳